

2024年度ジェンダー・セクシュアリティ研究 レインボー賞受賞論文について

オリビエ・アムール＝マヤール

(2024年度選考委員長)

生駒夏美

(推薦コメント)

森木美恵

(推薦コメント)

「ジェンダー・セクシュアリティ研究レインボー賞」は、ジェンダー研究センターの設立に尽力され、2014年にご退職された田中かず子教授により創設されました。賞の目的は、本学に提出された学士・修士または博士学位論文の中で、優れたジェンダー・セクシュアリティ関連研究を表彰し、そしてジェンダー・セクシュアリティ研究の一層の発展を期待するものです。2024年度は、優秀な論文が複数推薦され、佐々木心優さんの学士論文「性をタブー視する意識と日本人元慰安婦に対する責任問題の関係性」と吉元咲さんの修士論文「現代日本におけるモノセクシズム—日本社会で暮らすバイセクシュアル女性への聞き取り調査から」とに決定しました。

佐々木さんの受賞論文は、第二次世界大戦後の日本人慰安婦というタブーに挑戦し、日本人慰安婦問題の隠蔽と当時新たに制定された保守的な性教育課程の関連について論じています。著者は様々な歴史資料と二次的資料を付き合わせ、新性教育課程を利用して慰安婦の当事者個人に責任転嫁することによって、日本政府が戦時中の慰安婦より不可視化されている戦後日本人慰安婦たちへの補償責任を回避した様子を分析しています。慰安婦問題と戦後の性教育を統合的に論じることはコントロールバーシャルであるが、だからこそ著者の熱意を評価するものです。これらの理由により、本論は2024年度のレインボー賞にふさわしいと判断されました。

吉元さんの論文は、モノセクシュアルな社会規範の中で生きるバイセクシュア

ルの人々が直面している課題や困難を的確に明らかにしています。本研究は、日本社会におけるモノセクシュアリズムを正面から扱った数少ない研究の一つです。理論的枠組みと、20名へのインタビューから得られた実証データをもとに、日本のみならず国際的にも十分に研究されてこなかったバイセクシュアリティというテーマについて、豊かで丁寧な分析を提示しています。本論文は、バイセクシュアリティそのものではなく、モノセクシズムを主要な批判対象として位置づけることで、今後の研究につながる重要な理論的貢献を果たしています。さらに、日本におけるパートナーシップや結婚制度に対する批判に加え、インタビュー協力者の語りに根ざした代替的な関係性のあり方を提案しており、将来のアクティビズムにとっても有益な示唆を与えています。バイフォビア、バイセクシュアルの消去、モノセクシズムに関する理論を、豊富な実証データと効果的に結びつけており、全体として文章も明瞭で、論旨もよく整理された完成度の高い研究です。以上の理由により2024年のレインボー賞にふさわしい論文であると判断されました。

The Rainbow Award for Gender and Sexuality Studies in AY 2024

Olivier AMMOUR-MAYEUR

(AY2024 Selection Committee Chair)

Natsumi IKOMA

(Recommender's Comments)

Yoshie MORIKI

(Recommender's Comments)

The Rainbow Award for Gender and Sexuality Studies was established by Professor Kazuko Tanaka, who founded the Center for Gender Studies (CGS). The award's purpose is to recognize outstanding gender and sexuality-related research in B.A., M.A., or Ph.D. dissertations submitted to the ICU and encourage further development of gender and sexuality studies. Several outstanding papers were nominated for the academic year 2024, from which, Miyu Sasaki's senior thesis, "The Relevance of Sexual Taboo Consciousness and the Issue of Responsibility for Japanese Former Comfort Women" and Saki Yoshimoto's master's thesis, "Monosexism in Japan: Interview with Bi+ Women" were selected.

Miyu Sasaki's thesis challenges the taboo of Japanese Comfort Women after WWII and argues the suppression of Japanese Comfort Women and Japanese conservative sex education are deeply connected. The author successfully incorporates various secondary sources and historical primary sources and reveals how the Japanese government evaded responsibility of compensating postwar Japanese Comfort Women, who have been less visible in society compared to wartime comfort women, by shifting the blame onto them using this new sex education. The author's intention to intertwine the comfort women issue with post-war sex education is controversial, and we

fully appreciate the author's willingness to do so. As such, this thesis is considered highly worthy of the Rainbow Award for AY2024.

Saki Yoshimoto's thesis successfully sheds light on the issues and challenges faced by bisexual individuals living within monosexual social norms. It is one of the few studies that directly addresses monosexuality in Japanese society. The thesis offers rich and detailed analysis of the under-researched topic of bisexuality, both in Japan and globally, drawing on theoretical frameworks and empirical interview data collected from 20 participants. By elucidating monosexism as the primary object of critique, rather than bisexuality itself, the thesis makes a significant theoretical contribution that has the potential to stimulate future research. Furthermore, its critique of partnership and marriage systems in Japan, along with the suggestion of alternative relational frameworks grounded in interviewees' narratives, offers valuable insights for future activism. The study presents a unique and underexplored perspective on monosexism in Japan, particularly with regard to its impact on bisexual women. It also effectively integrates theories of biphobia, bisexual erasure, and monosexism with rich empirical data. Overall, the thesis is clearly written and well articulated.

日本人の性をタブー視する意識と 日本人元慰安婦に対する責任問題の関連性

佐々木心優

本稿では、なぜ日本の性教育が一向に改善されないのかを、第二次世界大戦後の元慰安婦の方々の歴史と、日本政府が彼女たちに補償をしなかったという問題の観点から考察する。

日本の性教育は、性交（セックス）について教えることを控える「歯止め規定」という考え方によって制限されてきた。この考えの根拠は、知らないことをあえて教えると、かえって好奇心や興味から性的な行動を促してしまうかもしれない、というものだ。しかし、正式な教育を受けない学生は、性の知識がないままであり、インターネットやSNSなどで情報を得ることで、間違った知識や偏見を持った認識を身につけてしまうことが多い。その結果、彼らは気づかぬうちに性的な加害者にも被害者にもなってしまう可能性がある。さらに、ジェンダーに基づく偏見は、個人の生活を困難にし、正確でない知識や偏見が、日常生活の中でジェンダー格差を徐々に広げていくことにもつながる。

そのため、日本は人権尊重を基本とした包括的な内容を取り入れ、性教育の目的を根本的に見直す必要がある。ジェンダー格差が小さい国々の中には、50年以上にわたって包括的な性教育を実施しているところもある。これらのプログラムが成功しているのは、質の高い性教育を受けた人が、大人になってより他者に寛容になり、その結果、公平な社会の発展に貢献していることから明らかだ。

性教育の質とジェンダーの不平等には関係性があるにもかかわらず、日本は性教育のカリキュラムを改善・拡大しておらず、「性」というテーマは依然として文化的なタブーとなっている。この現象は、戦後の日本における元慰安婦の歴史と関係があるのかもしれない。研究によると、日本の性教育の初期にあった「純潔教育」という考え方が、元慰安婦に対する間違った認識を広め、戦後の政府が補償を行わなかったという事実を見えにくくする結果につながった。つまり、現在「性」がタブー視されているのは、単にこの話題を嫌がるからというだ

けでなく、日本政府が元慰安婦に何も補償しなかったという歴史的な事実を隠すための意図的な手段となっている可能性も考えられる。

日本社会が元慰安婦の方々を「道徳的に問題のある人たち」として簡単に受け入れてしまったのは、日本の伝統的な国民意識や文化的な価値観に影響されていたことにも原因がある。加えて、世界的に見ても、日本で今なお売春がなくなる主な原因は、元慰安婦問題に対する日本政府の不十分な対応と、売春を容認する日本男性の一般的な考え方にあると言える。

以上のことから、日本で性教育を改善・拡充し、依然として「教えないこと」を中心としている現状を変えるためには、まず元慰安婦の歴史を認識し、その事実をしっかりと受け止めることが非常に重要である。

The Relevance of Sexual Taboo Consciousness in Japan to the Responsibility Issue for Japanese Former Comfort Women

Miyu SASAKI

This paper examines why sex education in Japan has not improved, considering the history of Japanese former comfort women after World War II and the issue of their compensation by the Japanese government.

Sex education in Japan is shaped by the concept of “Hadome Kitei,” which discourages teaching students about sexual intercourse. The rationale behind this approach is the belief that deliberately educating students about topics they are unaware of may, in turn, encourage sexual activity out of curiosity and interest. However, students who receive no formal education on the subject remain ignorant and often acquire false knowledge and biased perceptions due to seeking information through the Internet and social networking sites. Consequently, they may unknowingly become both victims and perpetrators of sexual abuse. Moreover, gender-based biases may make it difficult for individuals to navigate their lives. In other words, inaccurate knowledge and biased perceptions can gradually widen the gender gap in everyday life.

Therefore, Japan needs to rethink the purpose of sex education by incorporating comprehensive content based on respect for human rights. Some countries with low gender disparities have been practicing comprehensive sex education for over 50 years. The success of these programs is evident in the fact that individuals who received high-quality sex education have grown into more tolerant adults, contributing to the development of more equitable societies.

Despite the potential correlation between the quality of sex education and gender inequality, Japan has neither improved nor expanded its sex education curriculum, and the topic of sex remains a cultural taboo. This phenomenon

may be linked to the historical existence of comfort women in Japan after World War II. Research indicates that the inception of Japanese sex education, known as “Jyunketsu Kyoiku,” resulted in the spread of false perceptions about Japan’s former comfort women, which in turn obscured the fact that the postwar government did not compensate them. In other words, the current taboo surrounding sex may not be solely due to a general aversion to the subject but rather a deliberate means of obscuring the historical fact that the Japanese government failed to provide any form of compensation to former comfort women.

Furthermore, this study reveals that the ease with which Japanese society accepted former comfort women as morally corrupt figures was influenced by traditional Japanese identity and cultural values. Additionally, from a global perspective, the continued prevalence of prostitution in Japan can be attributed primarily to the Japanese government’s inadequate response to the former comfort women issue and the prevailing attitude among Japanese men who condone prostitution.

Thus, recognizing and acknowledging the history of Japanese former comfort women is essential to improving and expanding sex education in Japan, which still primarily focuses on what is left untaught.

現代日本におけるモノセクシズム ——日本社会で暮らすバイセクシュアル女性への 聞き取り調査から

吉元咲

本研究は、日本社会を生きるバイセクシュアル女性がモノセクシズムをどのように経験しているのかに着目し、彼女たちが被る不利益の社会的・文化的背景について、インタビュー調査を通じて明らかにすることを目的としたものである。

モノセクシズムとは、モノセクシュアル（1つの性別にのみ惹かれるセクシュアリティ）の方がバイセクシュアルを含む非モノセクシュアルよりも“普通”であることを示唆する規範のことで、これまで「LGB」や「同性愛・両性愛」といった形で同性愛と併記され、焦点を当てられてこなかったバイセクシュアル当事者の経験を理解するうえで重要な視点を提供するとされている¹。

しかし、バイセクシュアル当事者を対象としてモノセクシズムの実態を解明することを試みた研究は、筆者の知る限り日本では行われていない。そもそも日本国内では、バイセクシュアル当事者の経験に焦点を当てた論文自体が非常に限られている。

そこで本研究では、広義のバイセクシュアル（Bi+）に該当する20代～30代前半の女性20名を対象にインタビュー調査を実施し、モノセクシズムが日本社会においてどのように経験され、いかに彼女たちの生に影響を与えているのかを分析した。本研究でバイセクシュアル女性の語りにもみ焦点を当てたのは、非モノセクシュアルであり、かつ女性として生きる／女性とみなされることで、ヘテロセクシュアル男性からのエロティシズム化やレズビアンコミュニティとの軋轢など、特有のアグレッションを経験していることが先行研究によって指摘されているためである。

バイセクシュアル女性たちの語りの分析から、日本社会におけるモノセクシズムは、否定的な言説を通じたバイセクシュアリティの「抹消」としてのみなら

¹ Eisner, S. (2013). *Bi: Notes for a Bisexual Revolution*. Berkeley: Seal Press.

ず、制度的差別としても経験され、また強化されていることが示唆された。具体的には、彼女たちはバイセクシュアリティが「正当でない／存在しないもの」と印象づけられるなか、リスクを冒してカミングアウトをするか、違和感を抱えながらモノセクシュアルに「擬態」するかという二者択一の間で板挟みになっていた。さらに、バイセクシュアルに対する否定的な言説を内面化することで、自身について「十分にバイセクシュアル（もしくはクィア）でない」と感じたり、異性愛者の特権にアクセスできる「比較的生きやすい」存在であると捉えたりするようになり、異性愛社会とクィアコミュニティのどちらにも帰属意識を持ちにくくなっていることが示された。また、そうしたバイセクシュアル女性の周縁化を促すスティグマの生産・強化は、戸籍上同性同士の法律婚を認めない現行の法制度が一因となっていることも示唆された。

ただし、バイセクシュアル女性たちはモノセクシュアルのコミュニティに馴染めないからといって必ずしも孤独に感じているわけではなく、性的アイデンティティの同質性にこだわらない関係性を築くことで自分なりの居場所を形成している場合もあった。また、前述の制度的差別を解消するために同性婚の法制化が必要であることは前提としたうえで、婚姻制度それ自体に疑問を投げかけ、それに代わるような保障のあり方が開かれていくことに期待する姿勢も窺えた。

アカデミアにおいてバイセクシュアルの経験が素通りされていることは、それ自体が「バイセクシュアルの抹消」の1つの例であるといえる。日本ではこれまでバイセクシュアル当事者を対象にした調査が非常に限られており、またモノセクシズムに着目して分析する研究は行われてこなかったため、本研究は日本におけるジェンダー・セクシュアリティ研究に貢献できるという点では意義がある。しかし、日本社会におけるモノセクシズムの実態をより包括的に理解するためには、モノセクシズムとその他の抑圧構造との交差性なども意識しつつ、より多様なバイセクシュアル当事者、そしてモノセクシュアルの人々も対象とし、さらなる質的・量的調査を行う必要があるだろう。

Monosexism in Japan

—Interview with Bi+ Women

Saki YOSHIMOTO

This paper explores how bi+ women in Japanese society experience “monosexism,” a norm that privileges monosexuality (a sexuality defined as attraction to only one gender), and aims to identify the social and cultural context behind the disadvantages they suffer¹.

In other countries, there has been a growing body of research focusing on monosexism to examine oppression specific to bisexual individuals. However, in Japan, research on bisexual experiences is itself very limited. To the author’s knowledge, only three studies have focused on bisexual people’s experiences, and none of them explicitly used the concept of monosexism except for Kim and Nochi², who mentioned it briefly in their conclusion. Therefore, how bisexual people living in Japanese society experience and negotiate with monosexism has not been sufficiently explored.

This study clarifies how monosexism is experienced in Japanese society and how it affects bisexuals’ lives through interviews with 20 bi+ women in their 20s and early 30s. As both non-monosexual and women, bi+ women face unique forms of oppression, such as eroticization by heterosexual men and elimination from the lesbian community. Consequently, this study focuses solely on the narratives of bi+ women rather than analyzing bi+ people collectively.

The analysis of these 20 women’s stories suggests that monosexism in Japanese society is experienced not only as identity erasure through monosexuals’ discourses but also as institutional discrimination. Firstly, this

¹ Eisner, S. (2013). *Bi: Notes for a Bisexual Revolution*. Berkeley: Seal Press.

² Kim, J. and Nochi, M. (2023). Jyosei Bai Sekusharu wo Ikiru: Toujisha Doushi no Katari ai no Shitsu Teki Kentou Kara [Life as Female Bisexual: A Qualitative Study of In-depth Conversations between Female Bisexuals]. *Shitsuteki Shinrigaku Kenkyū*, 22, 296-313.

study shows that the three strategies of bisexual erasure are evident in Japanese society. The analysis also indicates that bi+ women are caught between the two options of coming out at risk or “passing” as monosexuals. Furthermore, internalized negative stereotypes lead bi+ women to feel “not bisexual (or queer) enough” and to develop a self-perception of having access to heterosexual privilege. It is also noted that because of this self-perception, bi+ women seem to have difficulty feeling a sense of belonging to either the heterosexual community or the queer community. Most importantly, this study indicates that the negative stereotypes causing this marginalization of bi+ women are produced and reinforced through institutional discrimination, which denies legal recognition of same-sex marriage, thus forcing bi+ women to give up the possibility of a future with a partner whose legal gender is the same as theirs.

However, the research shows that bi+ women do not necessarily feel isolated because they establish meaningful connections outside their sexual identity. It also emphasizes that, in addition to legalizing same-sex marriage to reduce institutional discrimination toward bi+ women, there is a need for systems that recognize and support diverse relationship types in forms other than marriage.

The fact that bi+ experiences are overlooked in academia is itself an example of bisexual erasure. This study is significant for contributing to gender and sexuality studies in Japan, where research on bisexuality remains very limited, and no studies have extensively analyzed monosexism. Nevertheless, to fully understand monosexism in Japan, further qualitative and quantitative research is necessary, targeting not only various bi+ individuals but also monosexuals, while considering the intersectionality between monosexism and other forms of oppression.